

「対話した」とは、 何を**した**ことなのか。

相手の返答から、問い・見方・仕事の進め方を確かめ直す



返答を聞いた後、自分の何を**確かめ直した**か。

対話の全体像をつかむ

始める前

目的・変えられる範囲・
決める人確かめる



やり取りの中

具体的な一件を聞く／
自分の理解を返す／
訂正から問い直す



話した後

分かったことと残る違いを
分け、必要な確認へつなぐ



相手に**尋ねる**とともに、自分の理由や前提も**伝える**。

必ず同じ順序で進める必要はありません。意見の変更や全員の合意も必須ではありません。

同じ返答でも、次の一言で変わる

見立てを決めたまま進む



何が難しいのかは、まだ未確認。

返答から確かめ直す



次に確かめるのは、意欲ではなく承認の進み方かもしれない。

「分かりました」の前に、**理解を返す**

自分の理解を示す



訂正できる問いを添える



訂正を受け取る



次の問いを選び直す



「合っていますか」という形より、**訂正の後にどう応じるか。**

架空の説明用事例。
聴くことを大切にし、必要なところで自分の理解も返します。

理解することと、採用することを分ける

意味を理解する



話し手

聞き手

相手は、何を伝えようとしているか。

事実を確かめる



話し手

聞き手

記録や、他の当事者の説明とも照らす。

案を判断する



話し手

決定権者

聞き手

目的・影響・権限を踏まえて検討する。

負担が増えるので、
A案には反対です。



話し手

聞き手

その理由は分かりました。
私は納期も気になっています。
資料を一緒に確認しませんか。

相手の意味を理解しても、判断が**同じになるとは限らない。**

進め方に加えて、**目的**も確かめる



「**どう導入するか**」の前に、「**何のために導入するか**」へ。

話す人の勇気だけに、頼らない



目的と権限



手順は見直せます。
予算は部長が判断します。

記録と共有



何を残し、誰に共有するか
を伝える。

時間と方法



別の時間や、個別に伝える
方法も用意する。

異論が出た後の応答で、話せる条件を支える。

発言を招くことと、提案の採用を約束することは異なります。

「分かりました」で閉じる前に

分かったこと、残った違い、次の扱いを確かめる。

問いを持ち帰る

引き続き考えたいことを残す。



追加で確認する

必要なことを、誰が・何で・いつ確かめるか。



判断する

決定者が理由を示す。異論を賛成に変えない。



保留する

不足する材料と、再開の条件を確かめる。



記録の確認と、決定への賛成は別。

次の対話で、一つの返答から始める

私は、
こう受け取りました。

聞き手



その部分は違います。

話し手



では、何を確かめ
直せばよいでしょう。

聞き手



相手の返答によって、自分の何を確かめ直せたか。

詳しくは、27ページの実践ガイドへ



会話例を読む
13-17ページ



シートを使う
20-22ページ



根拠を確かめる
24-26ページ

お問い合わせ・会社情報



33.8万人

のデータに基づく

組織で働く成人の研究と教育開発

組織行動科学®

Organizational-Andragogy®



お問い合わせ：
判断デザインラボラトリー



E-mail：
request@requestgroup.jp

【会社情報】 リクエスト株式会社

- 本社：〒160-0022 東京都新宿区新宿3丁目4番8号
京王フレンテ新宿3丁目4F
- 会社概要：<https://requestgroup.jp/corporateprofile>
- 代表取締役 甲畑智康：<https://requestgroup.jp/profile>
- 公式サイト：<https://www.requestgroup.jp/>

【企業概要】

リクエスト株式会社（本社：東京都新宿区、代表取締役：甲畑智康）は「より善くを目的に」を掲げ、**980社・33.8万人**の働く人達のデータに基づいた組織行動科学®を基盤に、8つの研究機関からなる企業です。

組織行動科学®は組織で働く私達の思考と行動が「なぜ起こり・なぜ続くのか」を事業環境と歴史・経験から解明し、より善く再現する手段です。

リクエスト株式会社の8つの研究機関



Behavioral
Robotics®
(HOBiROA®) 総研



smart creative
management®
総合研究所



OrgLogLab®
(組織論理学®
研究センター)



XR HRD®
(AIAndragogy®)
研究センター



ABA
Operations
Research®
センター



人的資本開発
プランニング®
センター



判断デザイン
ラボラトリー



公共行動
研究室®

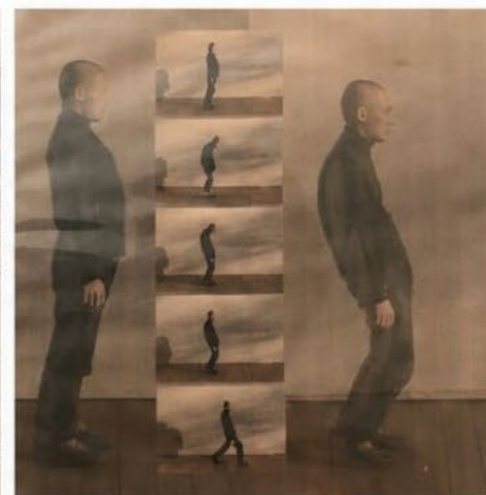
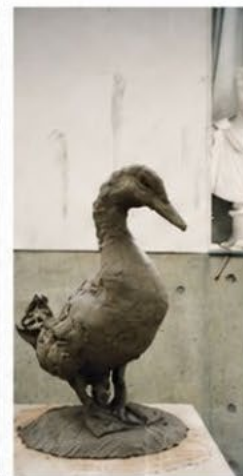
芸術実践から、 判断研究へ

代表・甲畑智康の原点 —

東京藝術大学での制作経験と、
現在の組織行動科学®・判断デザイン研究をつなぐ。

甲畑智康は、2003年に東京藝術大学美術学部を卒業し、
身体・空間・立体・素描・行為の制作を通じて、
既存の言葉だけでは捉えきれない現実に向き合ってきた。

その後、企業現場での人材育成・組織開発・判断研究へと
実践領域を広げ、現在は組織行動科学®を基盤に、
判断デザイン・判断経験設計・判断構造設計Proの
体系化を進めている。



1

芸大時代の制作



身体・空間 立体 素描 行為

2

問いの継続

- 👁️ 何を見ているのか
- ❓ 何を問うのか
- ★ 何を価値とするのか

3

現在の研究・実践

- 組織行動科学®
- 980社・33.8万人のデータに基づく研究と実践
- アート思考＝判断前提生成
- 判断デザイン・判断経験設計・判断構造設計Pro

芸術実践が問いの背景にあり、
顧客企業との長期の実地検証を
通じて、アート思考と
判断デザインを見出し、
体系化してきた。

正解がない仕事でも、 自分で判断し、前に進められる。



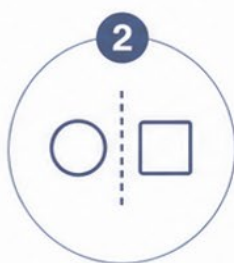
良い行動が生まれる上流には、必ず判断がある。

判断の質が、行動の質と成果を決める。



現場の事実を見る

目的に照らして、
何が起きているのかを
客観的に見る。



違いを捉える

理想と現状のギャップや
パターンの違いに
気づく。



判断する

基準に照らして、
何を優先し、何を
選ぶかを定める。



行動する

判断に基づいて、
自分で決めて
動き出す。



反応・結果を確かめる

相手の反応や結果を
確認し、事実を
集める。



判断基準を更新する

得られた事実から
基準を見直し、
精度を高める。

このサイクルが、判断できる組織をつくる。